

風を読む

——非言語的言語論の観点より見た文学的小説についての一考察——

小林 繁 吉*

Winde lesen

—— Betrachtung über literarische Werke durch die nonverbalistische Sprachtheorie ——

Shigekichi KOBAYASHI*

Abstract

Die Sprache im Werk ist jedem Leser so relevant wie seine tägliche verbale bzw. nonverbale Kommunikation mit anderen Menschen. Durch seine Sprachfähigkeit der totalnonverbalistischen Sprache mit den nonverbalen Sprachen hat er daran teil, dass er das vom Autor geschriebene verbale Werk anders als die Intention des Autors liest und interpretiert, kann sich mitteilen und seine Meinung äußern.

Die explizite verbale Sprache im Werk ist das, was den Leser vom Autor beim Lesen unterscheidet. Theoretisch kann man mit Recht sagen, erst durch die totalnonverbalistische Sprache mit der impliziten latenten Sprache und der unterbewussten nonverbalen Sprache werde das passive Werk, das vom Autor geleitet wird, zum aktiven Werk, das von der Leserseite aktiviert wird.

Key words: nonverbale Sprache, explizite verbale Sprache, Autor, Leser, Werk

〈「作者」について語ることはできても、「作者」を語ることはできない。〉

〈「作品」について語ることはできても、「作品」を語ることはできない。〉

上述の二文はつぎのように言い換えられる。「作者」に関係する事柄について、様々に、部分的に、ことばで語っていくことはできるが、「作者」自身を、存在そのものとして、全体的に、ことばによって再現することはできない。「作品」について、様々な方向から、様々な方法で、様々なことばで語っていくことはできるが、「作品」を語り尽くすことはできない。この言い換えられた二文は同じものなのであろうか。存在の表層形態が非言語的生命体としての作者を言語的

に語ることと、存在形態自体が視覚的にも聴覚的にも言語そのものから成り立っている何かを言語で語るとは、同じことであろうか。究極的に、仮称としての私の見る世界が、何らかのことばでなりたっているにしろ、ここでいうことばは、通常の意味での言語、顕在言語ではなく、非言語的言語とでも呼ぶしかないような何かなのであろうが、仮に、常識と称するものに依拠して、いわゆる具体的に日常生活で音声として発せられ、また文字に書かれているものをことばということにすると、上述の命題は次の様に定式化されうる。非言語的実体としての作者は、無限に言語化されうるが、言語そのものにはなりえず、言語そのものである作品は、すでに語り尽くされており、語り尽くされたという意味でのその完全な言語化によって、原理的には、言語的に語り得ないものになっているの

平成 14 年 12 月 26 日受理

* 総合教育センター・教授

であり、言語的には、自己完結していて、作品について何かをことばで語ることは、本来的に、不可能になる。冒頭第二文は、むしろ、〈「作品」を語ることはできても、「作品」について語ることはできない。〉と訂正すべきなのかもしれない。以上のように考えれば、作品について何かを語ることは、本質的に無意味になり、文学作品の批評的基盤を言語に置くことは原則的に不可能になる。

常識的に、生命や物質で満ちたこの世界を、ことばで言い表わすことはできるし、時間と空間の座標を取り入れて物語を物語ることも何ら支障はない。ことばについてことばで語りつづけることも、ことばをことばで置き換えていくことも、日常的に問題となることではない。ことばと物体、ことばと現象を、イメージを媒介にして、対応させたり、入れ替えたりしても差し支えない。いや、ことばで認識世界が成り立っているとしたら、言語と非言語的世界の区別こそが、世界の本質を、言語の本性をゆがめていることになるのであり、文学作品に限定せずとも、非言語的実体と称するものと、言語的実在を区別することに何の意味があるのか。

しかし、ことばについてことばで語るときに、志向対象について、ことばで語りはじめるときに、(人は)そのことばを、その志向対象を、字義通り、本質的に把握し、言語世界そのものを完全に捕らえ切っているわけでは全くない。一つには、ここでいう言語世界そのものが、分節化していて、分節化はあらゆる言語現象(すなわち、世界、現象界)に及んでいて、言語という言語、ことばということばにも、この作用が適用されており、非言語と取り敢えず呼ぶしかない言語的何かと、これが言語だと考えられている言語的言語(いわゆる、具体的現実的言語、顕在言語)に分けてみることは、そう無理な不自然なことではない。したがって、世界が言語でできているものならば、世界が先か、言語が先かという論は無意味なものとなり、在るのは、言語的言語と非言語的言語(言語的言語以外の

あらゆるものごとの総称)ということになる。最初の論題は、ここに来て、〈言語的言語で表現された非言語的言語「作者」について、言語的に表現することはできても、非言語的言語表現をすることはできない。〉となり、冒頭第二文は、〈言語的言語そのものである「作品」を言語的に表現することはできても、非言語的言語「作品」について表現することはできない。〉となる。上で定義された非言語的言語としての「作品」自体が非在なので、それについて語ることはありえないのである。

通常、文学作品はことばで形作られていると考えられており、文学作品である小説について何かを語ることは、小説言語が、顕在言語すなわち言語的言語であるという共通理解、共通認識に異存がなければ、言語的には、ほとんど無意味なのである。日常生活の場面場面でことばについてことばを費やしたり、ことばについてことばを語ることは、何ら特別なことではない。しかし、文学作品の場合は、作品をどこで切るか、どこまでと見なすかは別として、とにかく、一つのことばのまとまりとして括ることが、取り敢えず、可能であり、当該作品をどう読み込んでいくかということとは離れて、言語(ことば)として始めと終わりを設定することができ、ことばの群れの秩序というか、順序と整列状態を見い出すことが可能になる。

文学作品を一つの言語のまとまりと見なすことができた時に、実は、文学作品は、言語的に、静かな死を迎えることになり、静的固体となり氷結してしまうのである。言語作品は、一つの完結したまとまりとなった瞬間に、言語的に、固化し、固定してしまうのである。言語文学作品について言語的に語ることは無意味である、とはこの謂である。原理的に、不変化した(と見なされる)言語体を、言語によって変化させるのは不可能である。作品について何かを語ることは、永遠に禁じられていることなのだろうか。作品中の言語についても、言語的に語ることは、本来、してはいけないことなのだろうか。読者

は、批評家は、そして、作者も、作品について語っているのではないか。何が問題なのか。読者は、作品について語っているのではなく、ある場合は、作品中のことばについて、非言語的操作をして、非言語化されたことばについて語っているのであり、図式化を承知で敢えて言えば、作品中のことば、言語表現に、非言語的状況、非言語的言語を投影させているのであり、読者の顕在言語化以前の非言語的状態が想起されているのであり、作品内の顕在言語そのものや、顕在言語間の隙間に、非言語的状況が現出してきた、非連続体としての非言語的言語が見い出され、読者はそれについて語ることができるのである。本質的に、文学における作品論は、言語的には不可能であり、作品の中にある不連続な言語連関の隙間に現出してくる非言語的言語についてのみ語ることができるのである。このように、文学における顕在言語に基盤を置いた作品論の不可能性は、原理的、理論的には、不可能ということであっても、読者による作品論は、非言語的言語を想定してはじめて可能になるものである。

通常、我々は、ことばを語るが、ことばについてことばを語る時は、ことばAとことばBの間に常に意味の微妙なずれがあり、ことばの連続によることば同士の連関の差異化がある。しかし、この場合、ことばについてことばを語ることは、純理論的には不可能であり、ことばとことばの間に非言語的実体を想定していなければ不可能なことである。ことばと仮称する顕在言語は、常に、潜在言語や言語化不能言語や非言語的言語といった非言語的状況に取り囲まれており、顕在言語の出現は、（その人間にとって）意識さえしない一瞬の出来事であっても、数多くの、次の瞬間にも顕在言語に転化できる用意のある潜在言語と、決して顕在言語化できないと思いついての言語化不能言語（具体的には、絵画や映像等のイメージの総体等）や非言語的状況（人間には決して顕在言語化できない、つまり、意識化できない無意識的感覚の状態の

世界〈無意識状態の感覚世界〉）等の非言語的言語に支えられており、明示的顕在言語の基盤や背後には、暗示的潜在言語や上述の言語化不能言語や、言語的無意識状況等の非言語の総体がある。顕在言語を言語として成り立たせているのは、この非言語なのであり、また、一つの（と思いついて）顕在言語の出現には、非言語の目に見えない力が作用しているのである。

顕在言語の出現や成立におけるこの非言語の役割は、通常は人に意識されにくいものであるが、人間と人間との間のいわゆるコミュニケーション、意志疎通の際に、顕在言語の背景として常に在るものである。日常生活の具体的場面において、我々は、この意思疎通、人と人との交通の場で、無言で過ごすことが多い。この無言の場で顕在言語の出現率がゼロであっても、潜在言語（この場合は、各自の思考、声なき独白と考えてもよい。）等の非言語の働きによって、各々相手の意志及び意図、感情等を推し量っている。ほとんどすべての人間生活の実際の場面では、ことばには必ずと言ってよい程、具体的状況が随伴していて、例外はほとんどない。同じことば（言語的に同一のことば）がシチュエーションによって全く別の意味に取られたり、正反対の意味になったりしているのは、日常的に経験していることである。事は、単なるシチュエーションの違いなどではなく、言語主体の持つ非言語的言語能力の相違に関係しているのである。各人の非言語的言語能力の相違が、個人語となり、個性をつくり、顕在言語の出現パターンを習慣化する。人間が言語の束だとすれば、それは、顕在言語も非言語状況も含んだ総体としての人間の言語能力を指している。通常言語（すなわち顕在言語）には、常に（必ず）顕在言語外の非言語状況が随伴しているのであり、非言語的言語と全く切り離された、純粋な言語というのは存在しない。具体的場との関係を断ち切られた実験室的言語などというのはありえない。言葉が記号の一種だとしても、言葉が、無色透明で、中立で無臭で現われる普遍的場の実

現は夢に過ぎない。現実には、どんな言葉も、非言語的状況の影響下にあり、程度の差こそあれ、言語的に同一のことばでも、そのことばの現われ方、そのことばの受け取られ方、そのことばによるイメージの喚起は、千差万別であり、微細な相違から、極端な相違まで、様々な非言語的言語による差異化の段階がある。俗に言う、シチュエーションの違いというのも、この非言語的状況の違いなのである。純理論風に言えば、誰の目にも触れない、したがって、誰も読んでいないし、勿論、読んでいないから、理解もしていない、つまり、受け取り手がないことば、文字言語として、半永久的に存在しつづける読み手のいない文字としてのことばや、人間不在の場で、自動機械であるテープレコーダーから流れ出て来る聞き手不在の音声言語は、確かに、純粹記号言語と言える。しかし、これは、思考実験の場での理念に過ぎないのであって、人間にとっての言語（顕在言語）ではない。上記の場に、人間が居れば、その途端に、ある種の非言語的状況における言語の出現と見なされるのであるが、人間不在の場では、言語とは無関係である。

文字化された顕在言語のかたまりである小説は、読み手による文字言語の顕在化を待っている。小説は、読者の出現によって、非言語的状況を与えられて、顕在言語が意味を獲得するのである。このような場合のことばの意味というのは、受け手（読み手）の側の非言語的言語の反映なのである。このようにして、読むという行為によって、死んだように存在していた小説が息を吹き返し、沈黙し、眠り込んでいた作品が活気づき、語りはじめる。読者が作品に息を吹き込み、死せる文字が再生するのである。純粹無色透明で（人間にとって無意味無関係な）実験室言語が存在しないとすれば、言語は、常に、何らかの、非言語的背景を持ち、何らかの意味付けがなされ、色が着くことになる。読者による幾通りもの（理論的には、無数の）作品の読み方、味わい方、把握の仕方が、このようにし

て可能になる。

作者の意図と受け手である読者の意味の取り方には、通常、ずれが発生する。作者が意識するにしろ、意識しないにしろ、作者の側の非言語的状況の影響によって、作者の言語が生じてくる。作者の側の非言語的言語に支えられて、文字言語の収束物である小説が生まれてくる。作者の発した言語に附随する非言語的言語状況の大部分は消え去り、受け手である読者の側の非言語的状況が発生する。小説の作り手である作者不在の言語場では、受け手である読者の非言語的状況が優勢となる。読者の存在が不可欠にしても、小説を送り手の言語の形骸とのみ見なすのは、小説言語を、他の小説以外の文字言語、たとえば、日記、新聞・雑誌の報告文、論文等と同様のものとしていることになる。小説言語は、これら一般の言語とは異なるものと考えられる。小説（のような文学）以外の書物においては、書き手の意図の確認が最重要事なのであり、筆者の非言語的言語状況の再現や再構成が何よりも優先されているのである。報告文の中の言語を吟味することによって、筆者の意図を推し量り、筆者の志向した非言語的状況を再確認することが目標となるのである。この場合でも、言語の担っている非言語的言語の相違により、作者の言語表現の目的・意図と読者の受け取り方の微妙なズレが出てくるのは、言語の持っている宿命的なものと言える。

これに対して、小説言語は、作品として書かれた瞬間に、建前上は、作者の伝達内容や意図とは切り離され、作者の手を離れて、独立した存在となる。読者は、小説に関しては、作者の非言語的状況を、この文字言語によって推し量ることを意識の上で強制されているわけではない。小説言語は、生まれ落ちた時から、作り手である作者の手を離れよう離れようとする独立心旺盛なことばとして振る舞おうとするのであり、読み手である読者も、本来は、作者の意図を顧慮することなく、自己の非言語的言語状況をストレートに（直接的に）ぶっつけて、作品

としての小説に対すればよいのである。書物一般に対する読み手の習慣により、小説の読書に際しても、作者との濃密な関係を求めるのは、小説の読み方としては、正しい方法とは言えないと思われる。日記は、大抵、書き手と読み手が同一人物であるが、この場合に、上述の経緯が端的に現われる。ある非言語的状況での日記の書き手の書いたことばが、別な非言語的状況での日記の読み手（書き手と同一人物）によって、非言語的に再現される、または、再現されるように試みられる。理論的に言えば、日記のことばが書かれた場での非言語的状況がほぼ完全に再現されることはありえないのであって、日記を読んでいる時の非言語的状況が異なっているため、必ずや微妙なズレが起きてくる。しかし、小説以外の非文学的書物においては、理念としては、書き手は、書き手に附随する非言語的状況を言語に託し、再現しやすいように工夫し努力すると思われるし、読み手の方も、書き手の意図を汲んで、不完全であれ、書き手の非言語的言語を再現しようと、自己の非言語的言語に働きかける。書き手と読み手は、文字言語としての顕在言語を媒介にして、互いの非言語的言語を投影しているものであり、顕在言語を通して、非言語コミュニケーションを成立させようとしているのである。

小説における作者の行き方は、作者の意図や伝達内容（伝達したいメッセージ）があるにしても、直接的に作者の非言語的言語を読者に投げかけるのではなくて、直截的なテーマなり、意図なりを、隠蔽する形で、手を替え品を替え、様々な方法を使って、虚構の物語を作って、この物語の虚構性が巧妙で絶大であればある程、言語としての独立性が発揮され、次第次第に作者の非言語的状況が不透明になっていく。作者の非言語的言語の影響下で小説が生まれ出るとしても、作品の言語そのものは、作者の直接的非言語的状況を排するように語られ、作品全体として、作者の非言語的状況を背景に持つ意図や直截的伝達内容を隠蔽し、不透明にする。小

説言語そのものがこのようにできているのである。読者の側も、小説以外の実用的一般的読み物の読み方に囚われさえしなければ、小説作品の言語表現に作者の影を不必要に見い出す必然性はない。小説の読書本来の姿は、作者の非言語的言語状況を押し量るのではなく、読者の非言語的状況を、積極的に作品言語の中に投入することにあるのである。理論的には、小説の作者と読者の関係は断ち切られているのであり、小説言語が完成を見た時点で、作品言語と作者との絆が一旦切れることになるのであり、小説言語の場合は、読者との関係が最も重要なのであり、読者の非言語的言語の活用が、小説言語を活性化することになっていくのである。読者が作者の意図を押し量るのは、小説の（しばしば、重要な）読み方の一つであっても、本来の小説の読み方とは言えないであろう。小説言語は、様々に読まれるべくして在るのであり、作者の意図にのみ収束されるべきものであるはずがなく、作者も自己の作品の限定された読み方を期待して書いているとは考えにくい。作者の意図する読み方のみを読者に期待して書いているとしたら、小説形式でなく、小説形式以外の言語の方が伝達が容易なことは明白だからである。

小説による言語形式の方が、しばしば、作者の直接的な意図の伝達に関しては、誤解を生みやすい。言語（顕在言語）のみで成立している世界（場）が存在しえないとすれば、読書によって、常に、言語に非言語的言語状況がかぶせられ、読み手の持っている非言語的言語も含めた言語世界が構築されていくことになる。読み手の非言語的言語が、積極的に、強烈に、作品言語に作用していく時に、読み手は、作品の文字言語を通して、新たな、読み手の個性の発揮された、作品世界を作り出すことができる。作品は、作者の手を離れようとしているのであり、読み手は、作品を作者の手から完全に取り戻すべきである。結果的に、作者の術中にはまり、作者の意図に近いところに行くというようなこと

はありうるであろう。非虚構言語の場合と異なり、作者の意図から遠ざかるような読みができるかどうかは、作者と読者の知恵比べ、知的綱引きとなる。作者の術策に落ち入るか、作者の罫の圏外に逃げ切れるか、小説作品の読書は知的ゲームであり、常識という引力からの脱出である。

しかし、真の小説の読書においては、勝者も敗者もない。小説という文学的仕掛けの中に大いなる逆説（パラドックス）があるのだ。小説言語を通して、読者が作者の術中にはまった場合は、作者の勝ち、読者が作者の期待を裏切った時は読者の勝ちとすることはできない。常に読者が作者の罫にかかる小説言語は、小説としての本質から離れている。読者が作者の意図を押し量ることになってしまう小説言語は、その真価を充分発揮していない。読者の小説の読み方が、作者の意図から全く離れてしまった場合は、読者と作者の関係が断ち切れ、小説言語として活かされていることになる。この（発信者である作者と受信者である読者が逆転するという）パラドクシカルな関係性の中での、小説の読書こそが生産的なものとなるのである。評論家、批評家の役目と評論・批評の意義があるとするれば、このパラドクシカルな関係性を、具体的な作品を読み解くことによって示し、個としての（執筆時の）自己の非言語的言語状況をひき上げて、当該作品言語を活性化させ、新しい作品世界の構築を、自らの読み方によって提

示し、通常言語を支えている非言語的言語の存在を示唆することにあると思われる。

小説家によってつくられた明示的顕在言語の帆船は、非言語的言語の海に進水した。あとは、風の読み手を待つだけである。

参考文献

- Benjamin, Walter: Gesammelte Schriften. Bd. II-1 u. Bd. II-3. Frankfurt a. M. 1977.
Schlingmann, Carsten (Hrsg.): Methoden der Interpretation. Stuttgart 1985.
Schober, Otto (Hrsg.): Text und Leser. Stuttgart 1979.
Schulte, Joachim (Hrsg.): Philosophie und Sprache. Stuttgart 1981.
Weinrich, Harald: Literatur für Leser. Stuttgart Berlin Köln Mainz 1971.
ハンス・G・ガダマー著/斎藤・近藤・玉井訳: 哲学・芸術・言語 (未来社) 1983.
ロマン・ヤーコブソン著/川本茂雄他訳: 一般言語学 (みすず書房) 1993.
ジョルジュ・ムーナン著/伊藤晃他訳: 翻訳の理論 (朝日出版社) 1980.
A.マレービアン著/西田司他訳: 非言語コミュニケーション (聖文社) 1986.
M.L.パターソン著/工藤力監訳: 非言語コミュニケーションの基礎理論 (誠信書房) 1995.
W.・フォン・ラフラー＝エンゲン編著/本名・井出・谷林編訳: ノンバーバル・コミュニケーション (大修館書店) 1988.
マジョリー・F.・ヴァーガス著/石丸正訳: 非言語コミュニケーション (新潮社) 1987.
井筒俊彦: 意識と本質 (岩波書店) 1985.
ドイツ語学文学研究会編: Symposium. 第3号. 1988.